



ぼくは夜がすきだ。空で星がかがやき、みんながねむりにつこうとしてい
る、ちよっぴりあたたかくて、ちよっぴりすずしい夜。

通りすぎる車の音を子守歌にして、ぼくは体をまるめてねむりにつく。そ
うすると、ゆめのなか、母さんが見える。そうすると思いだす。

小さいころ、母さんによく言われた。

「よその犬とけんかをしてはいけないの。自分の家族をさがすのよ」って。
だけど、それがどういうことか、そのときはわからなかった。

「母さん、家族ってなあに？」

「みんながもつべきものよ」

「ぼくの家族って、どんなの？ なにみたい？」

母さんはにっこりした。

「それは、あなたが自分で見つけるのよ」



人間から見れば、
ぼくはどこにでもいるのら犬だった。
おなかがすいたようって目をして、
道ばたにねそべっている、
あばらのうきでた、うすぎたない、
あわれなのら犬。

1

アイスカ、パスタか



あつ日は、よく公園に行つてすずんだ。ふんすい池にジャブジャブ入る。あがつたら、体がかわくまでしばふでごろり、目をつぶってひとやすみ。その日も、そんなふうになころんでいたら、あの音がきこえてきた。

「チリン、チリン、チリーン！」

ぼくは耳をそばだてた。ほんとうにきこえた？ それともゆめ？

「チリン、チリン、チリーン」

ほんとうの音だ！ アイスクリーム屋さんの、すずの音！

ぼくは立ちあがって、前あしをぐーんとのはすと、ウサギをねらうオオカミみたいに、そろりそろりと音のするほうへ近づいていった。

あとちよつと。もうちよつと近づいて……、よし、今だ！

アイスクリームを買いおとならんでいる子どもたちの前で、ぼくはあわれなすて犬の顔をしてみせた。

運がよければ、やさしい子や、うっかりやの子から、とろーりつめたいチョコレートアイスをごちそうしてもらえさる。

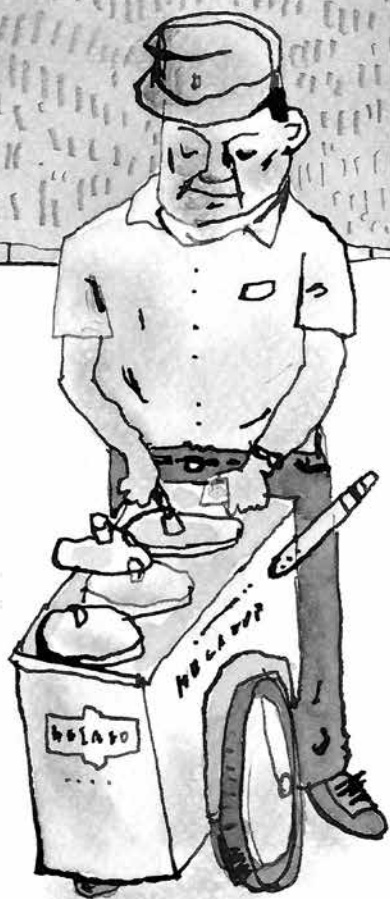
だけど、その日はついてなかつた。

ぼくはお肉屋さんに行った。肉屋のおじさん、なにかくれないかな？

でも、こつちもからぶり。人生はあまくない。運がいいときもあれば、わるいときもある。おなかにはぺこぺこのままだったけれど、のんびり水あびできたから、まあいいか。

そのうち、もっといいことがあるさ。





きょうは、もうねよう、とぼくは思った。だけど、近くのレストランからただよってくるにおいが気になってねむれない。そこで、ちょっとぶらつくことにした。歩いてくたびれたら、アイスのことも肉のこともわすれて、ねむれるかもしれない。

くらくらってから外を歩くときは、気をつけないといけない。食べものをあきりにきたいばりやの犬に出くわしたり、べつの犬のなわばりにうっかりまよいこんで、けんかにまきこまれたりしたら、たいへんだ。

だけど、その日は、カップルがさげていた、レストランの食べのこしが入ったふくろが、ぼくの目の前でやぶけたんだ。トマトソースの Pasta が、はでに歩道にぶちまけられた。まるでスローモーションみたいに。ときには、こんなこともあるのさ。

チーズはにがてだし、イタリア料理も大好物ってわけじゃないけれど、二日もまともな食べものにありついていない犬にとって、そのミートボール入り Pasta はごちそうだった。

はらぺこでねむれないかと思ったら、こんどは、高級イタリア料理でおなかがばんばんになるなんて、人生っておもしろいね。わらっちゃうよ。

ただ、こってりしたトマトソースのせいで、ひと晩じゅう、気もちがわるかった。もう一生、Pasta は見たくない。こんなにむかむかしてたんじゃ、長生きできそうにないけどさ。

つぎの日、ぼくはずっと母さんのそばでおとなしくしていた。

